

左の文章をよく読んで、後の設問に答えなさい。

一人の人間が持つものの見方や考え方は一つではない、ということにこれまでも何度か触れてきましたが、今回の〈考え方の教室〉では、その多様性をどうやって広げていくかということに重点を絞ってみたいと思います。

探究の出発点として、まず「人間の思考はいくつものものの見方が交じりあう複合体だ」と仮定してみます。すると人の頭のなかというのは、合唱のようにいろいろな考え方が出会いぶつかりあっている、いわば〈考え方の劇場〉のようなものとイメージすることはできないでしょうか。

こういう見方のヒントになる概念を最初に紹介したいと思います。それは、ロシアの文芸評論家ミハイル・バフチンが提唱した、「ポリフォニー」「カーニバル」という考え方です。「ポリフォニー」というのは「多声的」と訳されることがありますが、一人が歌っているのではなくて何人もが同時に歌っている、多くの声と同時に響く、合唱のような感じを意味する言葉です。「カーニバル」は文字どおり、複数の歌声が同時ににぎやかに鳴り響くような「祝祭」状態ということですね。バフチンは『ドストエフスキーの詩学』のなかで、この「ポリフォニー」「カーニバル」がドストエフスキーの小説の特徴であると述べました。つまり作者のモノローグではないということです。

あまり上手にできていない小説というのは、何人もの登場人物が出てくるにもかかわらず、皆同じ一人の人物が語っているかのように口調が似てしまっているものです。こうなると、登場人物の言うことややることが大体想像できてしまつて、読んでいても面白くない。

それがドストエフスキーの小説の場合は、一人ひとりの登場人物が次に何をするのかかわらないところがあるのです。登場人物どうしがまったく違う人間性を具えているように見えるというだけでなく、「ふと」何かの勢いで行動してしまつたり、思ってもいないことを言いだしたりして、読者の予想のつかない展開となることも多いのですね。それらがぶつかりあつて、小説空間がたえず複数の声にあふれ、カーニバル的になるというわけです。複数の異質なキャラクターたちが交わりあうことによつて、強烈な「多声的・祝祭的空間」が生まれている。

小説でも映画でも、登場人物それぞれの人格が独立していて、本当に何人もの異質な人間がここでぶつかりあっていると感じるとき、「ああ、リアルだな」と感じる人が多いのです。ポリフォニックであることで、リアリティが生まれ、作品に奥行きが生まれるわけですね。

私は毎年、大学の授業でドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』を読んでもらっています。なぜかというところ、この作品の登場人物はそれぞれに深みを持っているので、まずはそれを感じて人間理解力を養ってほしいとことがあります。そしてもう一つ、そういう深みを持つ人物どうしがぶつかりあつたときに起こるエネルギーのようなもの、ぶつかりあつた瞬間の醍醐味、ドラマティックでダイナミックな、これぞ生きている祝祭空間というべきものを感じてほしいからなのです。そしていつか自分が教師になったときに、学校の教室をそういうポリフォニックでカーニバル的な空間にしてほしいと思つているのです。

自分のなかに多様な〈考え方の技〉を持つこと、つまり自分のなかにポリフォニックなカーニバル空間をつくることをめざすならば、そうした考え方を学ぶ教室もまた、さまざまな人がさまざまな考え方をする場である方が面白いわけで、多様な答えが出てくる空間にした方がいい。先生が言ったことを生徒がそのまま復唱する、そういう学習法も確かにあるのですが、〈考え方〉を伸ばしていく教室空間では、一人ひとりが独立したそれぞれの人格として、自分の意見を言いあえるようにしたいのです。それが交じりあつて、合唱のように一つの音楽をつくりだしているという、そういう空間のあり方が重要なのですね。

ところが現代の主流はといえば、異質なものとぶつかりあうどころか、皆疲れるのがイヤなので、できるだけ自分の世界をくずさない状態で他者とつきあうことを求める場合がほとんどです。もちろんその方が安定しますし、ある意味快適でもあるでしょう。しかしそれが行きすぎると、人間の幅が狭くなつてしまふと思ひます。

できれば異質なものと的交流を通して、その変化、カーニバル的・祝祭的な空間を楽しめるようにしてみようというのが、私の教室での実験なのです。

異質なものとのお会いをおそれては、恋愛もできません。恋愛というのは異質な二者の出会いの最たるものだからです。異なつたものが出会いぶつかりあうからこそ、そこに火花が起こる。ゆらぎが生まれて、それが興奮やカーニバル的なものにつながるから、恋愛は人生の華なのだと言つてもいい。

大切なのは、異質なものとのお会いから受ける刺激を、ポジティブなものとして捉えていくことです。つねに刺激を受けられて、ほんの少しでもいいから自分も何か変化していく、刺激に対してオープンであることが、私たちの〈考え方の教

室」のなかではとても大切なことです。

(齋藤孝『考え方の教室』岩波新書、二〇一五年。なお、小見出しは省略した。)

【設問】 本文の趣旨をふまえ、傍線部にある「異質なものととの出会い」について、具体的な体験を挙げながら、あなたの考えを書きなさい。なお、字数は六百字以上八百字以内とします。(句読点などの記号や空白も字数に含む)